

社会問題に焦点を当て続ける  
小澤雅人監督 最新短編作品  
理想と現実に板挟みになった  
外国人留学生を描く

286万6715人。これは2020年1月1日時点での「日本に住むすべての外国人」の数だ。この数字は実に大阪市の人口をも超えている。大都市圏に住んでいると、コンビニやファーストフード店で外国人を見かけない日はない。こうしたサービス業でアルバイトをしている外国人は、実は多くが留学生だ。我々日本人には当たり前になっている便利な日常生活は、もはや外国人の存在なしには不可能になっているのである。一方、留学生の多くはアルバイトなしでは学費や生活費が賄えない。コロナ禍でそのアルバイトも失い生活苦に陥り、国に帰ろうにも航空券代を支払えず、困り果てた留学生の姿をニュースで見た人も多いだろう。日本にやってくる留学生たちが思い描いていた夢と現実とのギャップ。そんな留学生たちの実態に迫るこの映画が、少しでもその役に立てれば、と願ってやまない。 —— 監督：小澤雅人



## STORY

重度のギャンブル依存症のケンタは、今日も競馬で負けてしまう。家に帰ると両親は“介入者”と呼ばれる専門家と待ち受けていて、回復施設に入るように説得される。「ギャンブルはやめようと思えばやめられる」とそれを拒否したケンタは、家から逃走する。

ベトナム人留学生のハンは、昼も夜もアルバイトに明け暮れていた。留学ビザ取得の手伝いをしてくれた会社は、実は悪質な留学斡旋ブローカーで、多額の借金を背負っているのだ。母国では母がハンからの仕送りを心待ちにしているが、期待に応えるのは難しい。語学学校へ通う時間すらままならない本末転倒な状況に、心は晴れない。

ケンタは橋の下で一夜を明かすが、空腹に耐えられなくなり、近くの飲食店に入る。そこは、ハンがアルバイトしている飲食店だった。ケンタが食い逃げをしたことで二人の運命は交錯し、思わぬ方向へと導かれていく。